日本銀行小樽支店の明治42年における建築請負契約について

THE GENERAL CONTRACT ON THE OTARU BRANCH OF THE BANK OF JAPAN IN 1909

駒 木 定 正*

Sadamasa KOMAKI

The purpose of this paper is to consider how the general contract of the Otaru Branch of the Bank of Japan had been concerned with the contract system in the second half of Meiji era and the first unification of the contract form in Japan in 1909. The first contract form was proposed by the Institute of Japanese Architects that the president was Kingo Tatsuno who was an architecture adviser on the Bank of Japan.

The material in this paper is derived mainly from the documents of a new building on the Otaru Branch.

I analyze the subject under three headings: (1)The list of the bid requirements and the bill of quantities; (2)The contract documents and provision of the general contract; (3)The contract price and temporary payment.

Keywords : *the Bank of Japan, bidding, general contract, Kingo Tatsuno, Manzi Kasai, the Institute of Japanese Architects*

日本銀行、入札、請負契約、辰野金吾、葛西萬司、建築学会

1. 緒言

本論文は、日本銀行が小樽支店（現日本銀行旧小樽支店金融資料館、竣工明治45年、小樽市色内1丁目11番16号）を新築するため明治42年に行った請負入札と建築工事請負契約および請負金の仮渡しについて、小樽支店に所蔵されていた創建時の書類にもとづいて明らかにする。また、明治期における日本銀行の請負契約に関する史料およびわが国の請負契約制度の動向を比較検討し、小樽支店の請負契約についての歴史的意義を考察するものである。

明治期、日本銀行は辰野金吾を筆頭とする建築設計組織を編成して設計と管理をおこない、本店を最初に西部、大阪、名古屋の各支店、京都出張所さらに小樽支店、福島支店を組積造で建築した^(注1)。建築設計組織は、葛西萬司、細野（片岡）安、長野宇平治らを技師に擁した明治期を代表する設計集団であり、当時における先端の建築技術を導入していた。このことから請負契約においても先進的な体制を取り入れていたと推察されるが、従来、本店をはじめとする組積造本館の新築にあたり、どのように入札をおこない、工事請負契約書を締結し請負金を支払ったかについては、断片的にしか知られていない。なお、既往の日本銀行本店に関する論考には村松貞次郎、稲垣栄三、桐敷真次郎らの著書があり、辰野金吾の設計をととした日本銀行の建築については藤森照信の著作がある^(注2)。

一方、明治20年ころから40年代のわが国の建築請負制度は、近代の建設業が棟梁から建設資本金へと移行する揺籃期を反映し新たな

局面が展開した。明治22年、会計法の公布によって政府との契約は原則として一般競争入札を経ることになり、政府と建設業者間に契約書の交換をもたらした^(注3)。一方、建築学会（会長辰野金吾）は明治40年代に統一した規定の作成事業を起こし、とくに日本銀行小樽支店の請負契約手続きが進められた明治42年には、建築技師報酬規定案を通常総会で可決（1月）、それに際した数量書の議論があり、建築請負契約書案作成を企画（10月通常総会）した。翌43年に建築請負契約書案作成委員会を設置し、44年1月「建築請負契約書および工事請負規程」を制定した^(注4)。

これまで明治期の建築工事請負契約については城谷豊、岩崎脩、中村絹次らの広範囲な研究、また請負の経緯や建築工事費と請負金の授受の事例を克明に論考した喜田信代と羽深久夫らによる鉄川與助の天主堂に関する一連の研究がある^(注5)。

しかし、上記の既往研究と論述において建築学会会長でもあった辰野金吾を筆頭とする日本銀行の建築設計組織による具体的な請負契約の内容とその進捗を論じたものはない。

そこで本研究は、日本銀行小樽支店の新築に際して作成された請負契約に関する書類をもとに次の3点を中心に論述するものである。

- 1) 一式請負入札の要項と数量表の扱いについて
- 2) 建築工事請負契約の一式請負証書と請負人心得書について
- 3) 請負金と仮渡しの支払いについて

なお、拙論では、日本銀行小樽支店の主要構造と仕様書、建築設

本稿は拙論「日本銀行小樽支店の建築請負入札と請負契約（明治42年）」（日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）、F-2、2003年9月）を加筆したものである。

* 北海道職業能力開発大学校建築科 助教授・博士（工学）

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Hokkaido Polytechnic

計組織と小樽支店の設計者についてをまとめ^{注6)}、本稿はこれらに続くものである。

日本銀行小樽支店は2002年9月13日に閉店し、日本銀行旧小樽支店金融資料館として2003年5月14日から一般に公開されている。また、本建物は小樽市指定有形文化財（2002年9月17日指定）である。

図1 日本銀行小樽支店の竣工写真（明治45年）

表1 明治期日本銀行の組積造本館新築に関する請負関連史料

店名	着工（年号は明治）	竣工（年号は福島のみ大正、他は明治）	入札・請負関連資料	
本店	23.9.1	29.2.29	入札	明治23年9月3日の新聞紙上で入札公募 ¹⁾ 明治23年9月15日に地形工事、セメント、砂、砂利の見積りを徴す ¹⁾ 請負：建築地の土の入札 ²⁾
			請負人	建築材料・地形工事・土中室工に関する請負人と請負金額など ³⁾ 木材の請負人、取付品および設備関連の請負人と製造 ⁴⁾
西部支店	29.7.1	31.9	仕様書	「日本銀行西部支店新築仕様書」 ⁵⁾
大阪支店	31.12.8	36.1.24	請負人心得書	「日本銀行大阪支店建築所請負人心得書」 ⁶⁾
名古屋支店	36.9	39.6.30	—	—
京都出張所	36.9.1	39.7.3	—	—
小樽支店	42.7.6	45.7.25	入札	入札要領（入札書提出日、提出書類）、見積り図面と書類
			請負證書	請負人、保証人、請負総額・内訳、竣工期限、保証品
			請負人心得書	「日本銀行小樽支店建築所請負人心得書」
			仕様書	「営業所新築工事仕様書 小樽支店」
			着工	明治42年7月6日付「工事着手御届」
福島支店	44.8	1.11	請負人	部分請負の工事種別と請負人 ⁷⁾

凡例 「一」印は、入札・請負関連資料が未発見
表中の注 1) 葛西萬司・長野宇平治：辰野記念日本銀行建築譜、昭和3年12月20日。同『建築譜』は入札公募の新聞掲載を明治23年9月3日とするが「朝野新聞」では9月4日に掲載している。2) 建築雑誌、37号、明治23年1月。3) 明治24年12月28日までの請負人を記載。建築雑誌、65号、明治25年。4) 建築雑誌、112号、明治29年4月。5) 建築雑誌、124号、明治30年4月。6) 建築雑誌、135号、明治31年3月。7) 建築雑誌、333号、大正3年9月

表2 日本銀行小樽支店の請負入札と工事着手に関する文書一覧

年月日	文書の主な内容	差出	宛先	備考（添付、用紙ほか）
明治42年4月2日	支店新築工事一式請負と入札要領	日本銀行本店文書局	日本銀行小樽支店	入札要領を添付。日本銀行印付き野紙
明治42年4月6日	大虎、請負入札に参加の意思がない件	日本銀行小樽支店	日本銀行本店文書局	支店控文書。日本銀行印付き野紙
明治42年6月11日	日本銀行小樽支店新築工事一式請負證書	請負人富樫文治、保証人竹野喜兵衛	日本銀行	写し文書、請負総額・内訳および竣工期限・保証品を記載。「日本銀行」名入り野紙。
明治42年6月14日	入札と富樫文治の請負決定および新築費予算決定	日本銀行本店文書局長・島郁太郎	日本銀行小樽支店長・庄田茂三郎	新築費予算総額・内訳を記載。日本銀行印付き野紙。監督事務費明細、日本銀行小樽支店新築工事一式請負證書、日本銀行小樽支店請負人心得書を添付。
明治42年6月30日	工事着手期日の問い合わせ	日本銀行小樽支店長	日本銀行本店文書局長	支店控文書。「日本銀行小樽支店」名入り野紙
明治42年7月1日	富樫文治出発と工事着手の手順	日本銀行本店文書局長	日本銀行小樽支店長	電報送達紙
明治42年7月6日	工事着手届	富樫文治	日本銀行小樽支店建築掛	「富樫用紙」名入り野紙
明治42年7月7日	昨日（6日）より工事着手	日本銀行小樽支店長	日本銀行本店文書局長	支店控文書。無地用紙

2. 明治期日本銀行の請負契約に関する史料

2. 1 本店と支店の請負契約史料

小樽支店を除く明治期日本銀行の組積造本館の新築工事における入札と請負契約に関する史料は、『日本銀行建築譜』^{注7)}と建築雑誌などによってその一部が知られる（表1）。

日本銀行本店の新築工事に際した最初の入札公募は明治23年9月4日^{注8)}の新聞広告に掲載され、「朝野新聞」（第5080号、図2）によれば、日本銀行建築事務所は地形工事、セメント、砂利など7件について入札に参加する請負人を募った。この入札は会計法の公布から1年後のことであり、一般競争入札として受負人（ママ）心得書、工事仕様書、約定書を公開し、9月15日には地形工事、セメント、砂、砂利の見積りを入札参加者から徴している^{注9)}。

また、辰野金吾は大阪支店の請負人心得書の雛形を建築雑誌に掲載した^{注10)}。この請負人心得書は、辰野によれば、東京本店の建築工事に用いたものに手を入れ、さらに弁護士砂川雄峻が修正を加えたとする。雛形の種類は3つ（工手間請負人心得書、材料納方請負人心得書、一式請負人心得書）あり、いずれも条文と請負証書の書式で構成し、請負証書には請負人が「心得書を遵守し」「身元保証品を差入れ」「保証人を相立」「保証人は本人と連帯責任を負ひ可申候」

図2 日本銀行本店の入札広告（「朝野新聞」明治23年9月4日）

と誓約する書式である。この内容について、先学の城谷は「施主側の請負に対する一方的な条件提示の文書」であるが「施主と請負人との関係について（この場合の施主は官庁であるが）当時のむしろ先進的な状況を示している」^{注11)}と評す。

2. 2 小樽支店の請負契約書類

小樽支店の請負契約書類は、創建時の『営業所新築ニ関スル書類』(図3)に集録され、支店で保管していた。『書類』の内容は日本銀行小樽支店新築の基本設計から建築費決算までの本・支店間で交信した文書綴りであり、その構成は3冊(明治40年～44年、明治42年6月～大正元年8月、明治44年～大正2年)からなる。

前述のとおり小樽支店以外で入札手続から請負契約書の締結、請負金の支払いにいたるまでの一連の経緯が判明する事例がないことから小樽支店の『営業所新築ニ関スル書類』は、明治期における日本銀行の建築工事請負契約の実態を知る上で貴重であり、また、明治後期のわが国における請負契約史料としても稀少と考えられる。

本稿の基本史料は、上記の『営業所新築ニ関スル書類』(明治40年～大正2年)のほかに『日本銀行建築譜』、『日本銀行沿革史』^{注12)}、『日本銀行史』^{注13)}、『建築雑誌』を用いる。

3. 小樽支店の入札から着工までの経緯

日本銀行小樽支店の新築に際した請負入札から契約を経て着工に至る明治42年中の本・支店間における書簡の交信を概説する(表2)。

請負の方法と入札手続きに関する最初の書類は、明治42年4月2日に本店文書局から小樽支店に宛てたものである。書簡によれば、新築工事は一式請負を予定し、その入札要項を添付している。入札要領を支店に送付した理由の一つは、地元小樽の請負人(大虎・加藤忠五郎^{注14)})が入札に参加することを想定したためである(下記)。

今般貴店新築工事一式請負トシ入札ニ付スル事ニ相成候ニ付大席ニ於テモ請負ノ意思有之候ハバ入札(別紙心得書ニ拠リ)致ス様御申上相成度

しかし、同年4月6日、小樽支店は加藤忠五郎が入札に参加する意思のないことを本店文書局へ次のように報告している。

当店新築工事請負入札ニ関シ御来示之趣了承右大席ニ於テ請負ノ意思無之旨申出候ニ付左様御承知被下度

本店で実施した請負入札の結果、請負人に富樫文治^{注15)}(東京神田在住)が決まり(明治42年6月14日付、下記)、書状には新築費予算総額と監督事務費明細、雑費明細および「日本銀行小樽支店請負人

心得書」(図4)を添付している。

貴支店新築工事ノ義今般入札ノ上東京市神田区旭町拾参番地富樫文治ニ請負ハシムルコトニ相成候

さらに、請負人・富樫文治が明治42年6月11日に日本銀行へ提出した「日本銀行小樽支店新築工事一式請負證書」の写しも添えられている。書状の但書(下記)によれば、原本を本店で保管しその写しを小樽支店へ送付したのであり、書類の右上には「寫」と記す。

富樫文治請負証書ハ別紙写ノ通りニ有之右本書并ニ保証品ハ当局ニ保管置候間御承知相成度候也

着工の経緯を要約すると、小樽支店は請負人が新築現場に到着しないため本店に着工日を問い合わせ(明治42年6月30日付)、その返信(7月1日付)に「本日出発ノ答」「工事着手ハ本人着ノ上承知アリタシ」と記す。実際の着工は明治42年7月6日であり、請負人・富樫文治は小樽支店建築掛へ「工事着手御届」(明治42年7月6日付)を提出している。なお、日本銀行小樽支店の請負入札は、地元の請負人も参加できる準備を整えていたことから、広く門戸を開けた入札であったといえよう。

4. 小樽支店の請負入札

日本銀行小樽支店の入札に関する2つの事項を述べる。1つは請負入札の要項、2つ目は数量表(数量書)の扱いについてである。

4. 1 請負入札の要項と一式請負

日本銀行本店は小樽支店の新築工事を一式請負で行うために入札の要項を支店へ通知(前掲明治42年4月2日付)し、見積書の作成に必要な図面および関係書類(工事仕様書、数量表、明細表、請負人心得書)を送付するとともに手続き終了後にそれらを本店へ返却するよう伝えている(下記)。

入札書の提出日時は明治42年4月27日正午、開札は同日午後2時とし要項の送付から25日後にあたる。入札見積書には数量表に準じた内訳明細書の具備を要求している。図面は71枚に及び、内訳は不明であるが見積書作成に必要な一式が揃っていたことになる。設計の開始は40年春ごろに遡り、入札までの設計期間はおおよそ2年を要したことになる。設計開始の理由は明治40年6月に平面計画の素案(図5)が本店から支店へ送付された^{注16)}ことによる。

記

一、入札書差出日時 四月二十七日正午限り(午後二時開札ノ事)

一、入札見積書ハ別紙数量表ノ各項目ニ準拠シスル内訳明細書ヲ具備

図3 営業所新築ニ関スル書類

図4 日本銀行小樽支店請負人心得書

図5 日本銀行小樽支店設計案(明治40年6月)

スルヲ要ス

一、入札者ニ於テ本行ヨリ送付シタル図面及書類ニ就キ建義(マ)アル

トキハ入札期日前本行ニ質問セラルベシ

一、本行ヨリ送付シタル図面及書類ハ左ノ如シ

図面 七拾枚

工事仕様書 四通

数量表 参通

明細表 六通

請負人心得書 壹通

一、入札ニ加ハルノ希望ナキカ又ハ入札終了ノ上ハ前記図面及書類ハ

本行ニ返戻アリタシ

建築工事を一式請負で行うことは前掲のとおり明治42年4月2日付書簡の本文で記されているが、追伸(「追申」)でも「包括シタル見積書」を差出すよう重ねて伝えている。

仕様書ニハ一式請負ト直管トノ式通り有之候得共全部ヲ包括シタル見積書ヲ差出ス様御注意可被下候

管見の範囲では、明治期における日本銀行の組積造本館の新築中で一式請負を採用したのは小樽支店だけである。他店の請負形態は、本店と福島支店が分業(部分)請負^{注17)}であり、京都出張所も分業請負であった可能性が高い^{注18)}。日本銀行小樽支店の新築工事を辰野金吾は「一式請負ニハ珍シキ上出来」と評価し^{注19)}、請負人の富樫文治にその功績を讃えて金杯を授けている^{注20)}。

請負方法については、原林之助が「一式受負と分業受負」と題する演説(明治25年10月12日)で主張した一式請負の推進論に対し分業請負を推す妻木頼黄、横河民輔らと、優位性をめぐる議論があった^{注21)}。小樽支店の一式請負は、工程の進捗を「日本銀行小樽支店新築工事予程(ママ)及進工(ママ)類別表」(明治42年7月から44年10月初旬までの記録^{注22)})で見ればほとんど予定どおりに進行し、その内容も辰野が「上出来」と評したこと、明治末の地方における一式請負の成功事例の一つといえよう。

4. 2 数量表(書)の扱い

明治42年に日本銀行小樽支店の入札要項に定めた数量表^{注23)}の扱いは、同年1月29日の建築学会通常総会で建築技師報酬規定の制定に際して発言した横河民輔・遠藤於菟・妻木頼黄・曾禰達蔵らの意見に対して、葛西萬司が建築雑誌の論説で反論した「予算数量書は之を受負者に示さざるべからず」^{注24)}の論点と同様であった。

小樽支店と葛西の論点が同様である第1点は、建築家が数量表(書)を提示し、請負人がそれを参照して内訳明細書を作成することである。日本銀行は小樽支店の請負入札の要項において、先に建築設計組織が作成した数量表を入札参加者へ提示し、入札者に対しては数量表の各項目にもとづいた内訳明細書の差出しを求めた。また、葛西の論点は、請負人が適切な内訳明細書を作成するために、建築家が予め数量書を作成して請負人に提示し、請負人がそれに価格を記入して請負明細書を作成する方法を主張した^{注25)}(下記)。

建築家が工事を受負に附するに当り、図面と仕様書とを示して、受負者自身に数量計上に充分なる方便を與えた上、尚ほ建築家の計上したる数量は、此の如しとて、数量書を示し之に対し受負者をして、各自欲する所の価を記入せしむるものなり

第2点は、請負人が数量書の誤脱を発見した時はそれを訂正をしなければ請負契約後に施工義務が発生することである。日本銀行小

図6 「日本銀行小樽支店新築工事一式請負證書」抜粋

樽支店の前掲請負入札の要項には、書類に建議ある時は入札前に質問することを記し、また、請負人心得書では、条文を特別に追加して数量書の誤脱に関わる請負人の施工義務を規定した^{注26)}(5.2)。請負人は数量書の誤脱を見つけたら、見積書(明細内訳書)を差出す前に申立てて承認を受けることとし、請負契約後に発見しても図面と仕様書にもとづいて完全に竣工しなければならず、そのための増金の請求はできないとした。また、葛西萬司は、請負人が建築家の計上した数量にもとづいて内訳明細書を作成する時の訂正を許すが、一旦請負人が価格を設定して入札した場合は、数量書の数量を承認し同意したものと見做すことを主張している^{注27)}(下記)。

一旦其数量に価格を設定して入札したる上は、之を承認し即ち之に同

意を表わしたるものと見做して少しも不条理では無いと信ずる

以上、小樽支店の請負入札で数量書に準拠した内訳明細書の差出しと施工義務を定めたのは、葛西の論点と共通していた^{注28)}。ここで注目されるのは数量書をめぐる建築学会の議論の発端と日本銀行本店から小樽支店へ入札要項を送付した時期が明治42年1月から4月の短期間に集中し、その関連性が窺われることである。1月29日に建築学会通常総会での発言、4月号の建築雑誌に葛西の論説掲載、4月2日には日本銀行本店から小樽へ入札要項の送付があった。さらに葛西萬司はかつて日本銀行技師長であり^{注29)}、42年には辰野葛西事務所で日本銀行顧問の辰野金吾と連携を密にする立場にいたことから、葛西の意見が小樽支店の請負入札書類作成に何らかの影響を及ぼした可能性が推察される。また、先学の城谷は数量書をめぐる学会での「論争の影響や効果を具体的に追跡することはむずかしい」^{注30)}とするが、当時日本銀行は数量書を葛西の意見と同様に小樽支店の入札で請負人に示したことからその影響が窺われるのである。

5. 建築工事請負契約書

建築工事請負契約にあたり日本銀行と富樫文治は「日本銀行小樽支店新築工事一式請負證書」と「日本銀行小樽支店請負人心得書」を作成した。現在、それらは一般的に契約書と約款に相当する^{注31)}。

5. 1 一式請負証書

明治42年6月11日、請負人富樫文治は保証人・竹野喜兵衛^{注32)}と連署で「日本銀行小樽支店新築工事一式請負證書」(図6)を日本銀行へ提出した。請負証書の記述は、請負金額、建物と外構工事ごとの金額(表3)、竣工期限と遅延賠償金、保証品および本文が順に並ぶ構成である。証書の書式は請負人心得書の末尾にある「書式 一式

表3 「日本銀行小樽支店新築工事一式請負證書」の工事別請負金額
一金35万3062円19銭5厘 一式請負総額
内訳

本館	267,520 円 46 銭 1 厘	293坪7合6勺 ¹⁾
金庫	28,528 円 85 銭 2 厘	53坪9勺 ²⁾
付属家	18,927 円 52 銭 5 厘	88坪9合8勺 ³⁾
石炭庫、階段、室内玄関	1,779 円 84 銭 5 厘	8坪7合4勺
行員便所	2,361 円 50 銭 9 厘	6坪2合4勺
物置	3,032 円 61 銭 5 厘	13坪6合3勺
堀及下水溝	27,814 円 52 銭 8 厘	—
外廻工事	3,096 円 86 銭 0 厘	—
合計	353,062 円 19 銭 5 厘	

注 1) 付：本館廊下 (30坪4合6勺)。2) 付：金庫廊下 (17坪2合3勺)。3) 内：宿直室・食堂その他 (58坪6合6勺)、韃場 (19坪8合9勺)、便所 (10坪4合3勺)。付：付属家廊下 (21坪1合1勺)。「付」は付属工事と面積、「内」は工事内に含むことを意味する。

請負證書」(図7) に準じて記載されている。

一式請負金額は、35万3,062円19銭5厘であった。請負工事の項目は建物と外構工事に大別でき、建物は本館、金庫および付属家(宿直室、食堂、韃場、便所、廊下)、石炭庫であり、外構工事は堀、下水溝、外周工事と請負金額が計上されている。韃場は小樽支店の特徴の一つであり、砂金を鎔解させる設備を備えていた^{注33)}。

竣工期限は2期に区分し、第1期は金庫を「契約ノ日ヨリ拾貳ヶ月」、第2期は本館とその他の建物を明治45年7月31日とした。金庫の具体的な竣工期限は一式請負契約を締結した明治42年6月11日から1年後の明治43年6月10日であった。しかし、実際に竣工したのは明治43年8月8日であり、およそ期限から2ヶ月後のことである^{注34)}。工事が遅れた理由は2つあり、1つは窓の石材彫刻の際に誤って毀損したため産地である備中北木島から輸送するのに時間を要したこと、2つ目は海外に注文していた「亜鉛板」が船便の都合で延着したためである^{注35)}。この工期延期に対する遅延賠償の書類が『営業所新築ニ関スル書類』中に見られないことから、日本銀行は請負人の不備を問わなかったと推察される。なお、証書では遅延賠償金について「遅延日数五日毎ニ総請負金高ノ壹百分ノ壹トス」と記述している。

本館、付属家などの竣工引渡は契約よりも4日早い明治45年7月27日であり、「工事落成御届」が富樫文治から日本銀行小樽支店へ同日付で提出されている^{注36)}。

保証品は豊国銀行本郷支店発行の定期預金証書であり、その金額は請負金額の1割に相当する35,306円22銭であった(下記)。

右保証品 明治四拾貳年六月拾壹日株式会社豊国銀行本郷支店発行定期預金証書ろ號第八壹番
金參萬五千參百六圓貳拾貳錢也壹枚

証書の本文(下記)は、大阪支店の請負証書の雛形と基本的に構成が同じであり、実際の工事に則して小樽の所在地、請負金額が記載される。ただし、保証金の不足については、大阪支店の雛形では単に「保証人は本人と連帯責任を負ふ」としたのに対し、小樽支店ではより具体的に保証金による支払が不足する場合は連帯して弁償する責任を負うと記し、保証人の責務をより明確にしている。また、本文中に遅延賠償金についての記載はないが、既に竣工期限の箇所で併記しているので削除したと推察される。大阪支店では「□日毎に総請負高の壹百分の□を差出」(□印は空欄)と記す。

右ハ今般北海道小樽区色内町ニ於ケル貴行小樽支店御建築ニ付前書金參拾五萬參千〇六拾貳圓拾九錢五厘也ヲ以テ一式請負契約仕候就テハ一式請負人心得書給図面仕様書等ヲ遵守シ誠実ヲ旨トシ前記日限迄ニ

図7 請負人心得書「書式 一式請負證書」抜粋と第三十二条の追加

表4 「日本銀行小樽支店請負人心得書」の条文の要点

第1条 見積書の差出	第12条 材料の取替	第23条 請負金の支払
第2条 保証人と保証品	第13条 ¹⁾ 材料の交付	第24条 危険に対する負担
第3条 監督者	第14条 図面、仕様書等による施工	第25条 担保と修補
第4条 現場監役者	第15条 工事不都合の直し	第26条 基礎工事の担保と修補
第5条 監督者と現場監役者の指図	第16条 模様替と建坪の増減	第27条 工事中止と契約解除
第6条 工事のh変更	第17条 工事時間の厳守	第28条 保証品の売却
第7条 ¹⁾ 他の請負人に対する便宜	第18条 請負人の工事場への出張	第29条 落成期限の猶予
第8条 工事と材料の所有	第19条 不適当なる使用人	第30条 予防
第9条 契約の変更と解除	第20条 工事場取締規則	第31条 近隣に対する注意
第10条 違約による契約解除	第21条 工事落成期限と違約金	第32条 公衆に対する注意
第11条 材料の検査	第22条 引渡手続	第33条 ²⁾ 数量表の誤脱

注 1) 条文の削除、2) 条文の追加

無相違竣工シ御引渡シ可仕候依テ前記保証品ヲ差入レ左ニ署名スル保証(ママ)人ヲ相立申候若シ一式請負人心得書ニ依リ自分ヨリ貴行へ支払フヘキ金円ヲ支払ハサルトキハ保証品(ママ)御勝手ニ右支払ニ御充用被下度又萬一保証品全ニシテ右支払金ニ満タサルトキハ不足金ハ本人及保証人連帯シテ弁償ノ責任ヲ負ヒ可申候為後日證書依テ如件

5. 2 請負人心得書

請負人心得書は印字された全14ページの冊子であり、その構成は表紙(図4)と32条の条文および「書式 一式請負證書」(図7)からなる。冊子の印刷形式は日本銀行の各建物で共通に使用できるように建物名称、日付、請負人と保証人名の記載箇所を適宜空欄にしている。さらに、冊子には小樽支店の請負契約内容に即して直接手書きで名称の加筆と条文の修正が施され、条文の追加(第三十三条)と削除(第七条と第十三条)も書き込まれている(表4)。

条文の記載内容は、大略請負人(富樫文治)の義務を規定するものである。その主な条文を挙げると、第2条^{注37)}は請負人が保証人と連署で保証品を差出すことを定め、第9条^{注38)}は請負人が請負契約の変更、解除を申しでることができないと規定し、ただし日本銀行がやむを得ない事情と認めた時、請負金額の2/10以下を納金させて変更・解除することもあるとした。また、第10条^{注39)}は請負人の違約によって契約を解除した場合に保証品を返還しないことを規定している。請負契約に際して請負人が発注者に保証品を預ける制度は明治期に一般化し、大正8年、日本土木建築請負業者聯合会が設立目的の一つとして片務の問題であり改善事項に挙げている^{注40)}。

追加した第33条の内容は、前述(4.2)のとおり数量書の扱いについてである。削除の条文は、第7条が日本銀行の都合によって他の請負人に任せることについて^{注41)}、また第13条は材料の現品交付に

ついて^{注42)}である。前者は請負の一切を富樫文治に任せることとし、後者は材料を請負人が取り揃えることを意図した修正と推察される。ただし、アスファルトの購入は日本銀行が代行し、請負人に交付している（6.2）。

6. 新築費予算および請負金と仮渡金

6. 1 新築費予算と請負金

新築費予算と請負金について、前掲明治42年6月14日付の書簡とその添付書類にもとづいて述べる。

日本銀行の新築費予算総額は37万9,768円67銭であり、一式請負金（35万3,062円19銭5厘）を除いた予算は日本銀行の監督事務費（2万264円40銭）と雑費（6,442円7銭5厘）であった。なお、一式請負金の内訳は、本館26万7,520円、金庫2万8,528円であり、2つの建物を合計すると請負金の84%を占め、それぞれ76%と8%である。

新築費予算に対し竣工時の決算は、大正元年12月17日付の報告^{注43)}（小樽支店長から総裁高橋是清宛）でみれば、予算総額内で竣工している。ただし、別途工事として上記の予算総額に2,499円48銭8厘を上乗せし付属家（砂金分析用溶解爐と設備）と給水工事に充てている。この増額は当初予算総額の0.65%であった。

6. 2 仮渡し

日本銀行は富樫文治の請負工事に対して暫定的に仮渡しをしていた。この支払いは請負人心得書第23条（下記）の規定にもとづくものである。同23条によれば、請負金の支払い時期は工事が悉皆落成し、引渡し済んだ後としている。ただし、落成前であっても工事の出来高あるいは持ち込みの材料に応じて仮渡すこともあるとし、その金額は請求の8割に相当することが記されている。

第二十三条
請負金ハ工事悉皆落成引渡済ノ上相渡スヘシ 但工事落成前ト雖モ工事ノ出来高或ハ持込検査済ノ材料ニ応シ其八分ニ相当スル金額ヲ仮渡スルコトモアルヘシ

明治44年10月28日までに8回の仮渡しがあった^{注44)}（表5）。富樫文治の仮渡し総請求額は33万8,573円54銭7厘であり、八分金として27万1,085円57銭9厘を受領している。本館と付属家の竣工引渡日（明治45年7月27日）よりも9ヶ月早い明治44年10月の時点での総請求額（約33万8,500円）は請負金（約35万3,000円）に対して95.9%に相当する金額であり、請負工事も概ねできていたのである^{注45)}。

8回の仮渡日を本館と金庫の建築工事の進捗状況^{注46)}に照らすと次のような関連が見い出された。第1回の仮渡日である明治42年9月25日は、基礎工事が終了した時期に相当する。2回目の明治42年11月27日と6回目の43年11月29日は、それぞれ年度の主たる工事が冬季になるために終了する時期である。3回目の明治43年5月30日は、43年度の工事が4月に始まり、5月から鉄扉取付けが開始した時期である。5回目の明治43年8月19日は、金庫が竣工した8月8日の直後である。なお、4回目の明治42年12月29日の請求は日本銀行がアスファルトを富樫に代わってイギリスから輸入した立替分である^{注47)}。

富樫文治は、明治44年11月14日、請負人心得書の規定には記されていない二分金の支払いを「御願」で小樽支店長へ宛てて請求（6万7,487円96銭8厘）した^{注48)}。請求の理由は、二分金が材料と工事間代であり、間もなく冬季のため来年の4月まで休業することからそれらの支払いにあてるためと記している。

表5 富樫文治の仮渡金請求と八分金・二分金

	年月日	請求高	八分金（領収）	二分金	注
第1回	明治 42 年 9 月 25 日	61,381 円 8 銭 7 厘	49,104 円 86 銭 9 厘	12276 円 21 銭 8 厘	
第2回	明治 42 年 11 月 27 日	28,753 円 75 銭	23,003 円	5750 円 75 銭	
第3回	明治 43 年 5 月 30 日	58,205 円	46,564 円	11641 円	
第4回	明治 42 年 12 月 29 日	1,133 円 71 銭	1,133 円 71 銭	0 円	1)
第5回	明治 43 年 8 月 19 日	79,771 円 25 銭	63,817 円	15954 円 25 銭	
第6回	明治 43 年 11 月 29 日	32,953 円 75 銭	26,363 円	6590 円 75 銭	
第7回	明治 44 年 6 月 29 日	48,938 円 75 銭	39,151 円	9787 円 75 銭	
第8回	明治 44 年 10 月 28 日	27,436 円 25 銭	21,949 円	5487 円 25 銭	
合計		338,573 円 54 銭 7 厘	271,085 円 57 銭 9 厘	67487 円 96 銭 8 厘	
注 1) アスファルト代金として日本銀行立替分 引用 『営業所新築ニ関スル書類』富樫文次（治）の「御願書」、明治44年11月					

同11月14日付で小樽支店長は、「総裁男爵高橋是清」に宛て「当店新築工事ハ漸次進捗シ大略出来致候」「残工事ハ僅ニ金壹万三千余円ヲ以テ全部竣工可致」「現在出来部分ニ付テハ何等不都合ノヶ所モ無之」「受負保証トシテ金参万五千参百余円ノ提供モ有之候」と記し、払渡しの詮議を申請した。日本銀行はこれに対して5万円の支払いを認め^{注49)}、富樫文治は明治44年11月28日に保証人竹野善兵衛と連署で再度「御請書」を支店へ提出している。日本銀行が請負人心得書の規定をこえて二分金の仮渡しを認めたのは、工事がほぼ完成していたことから特別の計らいをしたものと推察される。

7. まとめ

本稿は日本銀行小樽支店の建築工事請負契約について、『営業所新築ニ関スル書類』にもとづき、(1) 請負入札、(2) 建築工事請負契約、(3) 請負金の支払い、を論述した。概括すれば、(1) 請負入札は、一式請負を前提にした競争入札であり東京神田の新興請負人富樫文治が落札したが、一時、日本銀行は地元小樽の加藤忠五郎の入札参加も準備していた。数量表（書）にもとづいた内訳明細書の作成と施工義務を入札要項と請負人心得書で規定したが、その内容は葛西萬司が明治42年に建築学会の報酬規定制定に際して主張した数量書の扱いと同様であった。とくに請負人心得書で数量書に関する条文を追記したことから、日本銀行と葛西との関連が窺われることを指摘した。(2) 建築工事請負契約書類は一式請負証書と請負人心得書からなり、証書によって富樫の請負金額（約35万円）、保証金（請負金額の1割）および保証人（竹野善兵衛）と連署で図面、仕様書を遵守して竣工する誓約を明らかにした。請負人心得書は主として請負人の義務を規定し、契約時に差出す保証金は明治期の請負契約制度と共通していた。(3) 請負金額における本館・金庫などの建築費と大正元年の決算を比較し、ほぼ予算どおりに竣工したことを述べた。日本銀行は請負人への仮渡しを明治44年10月までに8回行い、八分金と二分金の支払い状況を明らかにした。

日本銀行小樽支店の建築請負契約は、明治後期の請負制度の状況を反映し、とくに明治42年のわが国で嚆矢となる建築規定統一の動向とも関連が見られることから、当時の請負契約の実態を示す希少な事例といえる。今後、建築学会における建築請負契約書案作成の審議が明治43年から展開されたことに注目し、日本銀行小樽支店の建築請負契約との関連について研究を進める予定である。

謝辞 故遠藤明久博士、日本銀行および日本銀行貨幣博物館の方々からご助言と史料の提供を賜り、ここに感謝の意を表します。

注
注1) 日本銀行本支店および出張所の建築年は表1に示す。福島支店の着工は明治44年8月であり、本稿では明治期建築として扱う。
注2) 村松貞次郎：日本近代建築技術史、1976. 9。稲垣栄三：日本の近代建築

[その成立過程]、上、1979.6。桐敷真次郎：明治の建築、2001.4。藤森照信：日本の建築[明治大正昭和]、3国家のデザイン、1979.2。

注3) 日本工学会：明治工業史 建築篇、p.260、1927.4、再版1930.5、工学会明治工業史発行所

注4) 建築学会は請負契約書の標準を定めるため、明治42年11月の役員会において委員会を企画し、43年3月の通常総会で事業立案を起草、44年1月の通常総会で原案を可決した(建築雑誌、第292号、pp.203～204、1911.4)。この契約書と規程は、わが国の統一民間建築請負契約約款の嚆矢となる。

注5) 城谷豊：発注制度の改革、近代日本建築学発達史、pp.576～598、1972、復刻丸善1992.1。小野一成：建設産業、同上、pp.643～675。岩崎脩：建設工事請負契約の研究、清文社、1987.12。中村絹次郎：新版建設工事請負契約要論、清文社、1974.9。山下壽郎：建築施工契約制度論叢、私家版、1978.6。喜田信代、羽深久夫：鉄川與助の明治期の建築経歴と桐古天主堂の請負内容、日本建築学会計画系論文集、第566号、2003.4。喜田信代、羽深久夫、本間博文：冷水天主堂における鉄川與助の請負内容、日本建築学会計画系論文集、第568号、2003.6。喜田信代、羽深久夫、本間博文：奈摩天主堂における鉄川與助の請負内容、日本建築学会計画系論文集、第578号、2004.4

注6) 拙稿：日本銀行小樽支店(明治45年)の主要構造と仕様、日本建築学会計画系論文集、第471号、pp.139～146、1995.5。拙稿：明治期日本銀行の建築設計組織と小樽支店(明治45年)の設計者-辰野金吾、長野宇平治、岡田信一郎の関わり、日本建築学会計画系論文集、第570号、pp.117～123、2003.8

注7) 葛西萬司・長野宇平治：辰野記念日本銀行建築譜、墨彩堂、1928.12

注8) 前掲『日本銀行建築譜』に「明治二十三年九月三日都下各新聞紙にて廣告し入札希望者を募り」と記すが、「朝野新聞」掲載は翌9月4日である。

注9) 前掲、『辰野記念日本銀行建築譜』の「日本銀行建築録」に記載。

注10) 辰野金吾：日本銀行大阪支店建築所請負人心得書、建築雑誌、第135号、pp.93～100、1898.3

注11) 前掲、城谷豊「発注制度の改革」p.583

注12) 日本銀行沿革史編集委員会編：日本銀行沿革史、1913、復刻 日本評論社 1976

注13) 日本銀行史料調査室編：日本銀行八十年史、1962.10

注14) 加藤忠五郎(安政3(1856)年7月28日～昭和5(1930)年11月16日)は、明治14年7月に継父寅吉とともに東京から小樽へ渡って建築請負業を営営し、小樽および札幌の主要建築を手掛けた。日本銀行小樽支店の新築工事では、明治41年の板囲工事を請負い、本館工事では下請として参画し、上棟式(明治43年11月3日)と落成式(45年7月8日)の参列者名簿(『営業所新築ニ関スル書類』)に記載がある。他の主な建築は小樽区公会堂(基本設計木子幸三郎、明治44年7月)、北海道銀行本店(設計長野宇平治、明治45年7月)がある。拙稿：「大虎」加藤忠五郎について、日本建築学会北海道支部研究報告集、第59号、pp.305～308、1986.3。拙稿：小樽区公会堂(明治44年)について、日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)、pp.909～910、1991.9

注15) 富樫の名は、書類中では「文治」と「文次」の二通りがあり、本稿では請負契約書に記載の「文治」で統一する。富樫(東京市神田区旭町13番地)が日本銀行の建築請負に携わったのは、本店の大小砂利と川砂(日本銀行ノ新築工事)、建築雑誌、第65号、pp.129～132、1892)、福島支店の大体工事のほか仕上・建具・左官・塗師の各工事(『日本銀行福島支店の建築』、建築雑誌、第333号、pp.502～503、1914.9)がある。竹田米吉(1889年～1976年、『職人』pp.41～57、公文庫、1991)によれば、明治期における東京神田の「新興の大きな棟梁」の一人であり、「今日の建築請負業のような組織を形成しつつあった」、竹田が幼少の頃富樫は「すでに棟梁から請負人の組織に転向しつつあった」と記す。

注16) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』(自明治40年至明治44年)の出仕年月日・明治40年6月8日に綴られ、封筒に「小樽支店新築図面、写」の記載。

注17) 日本銀行本店の部分請負は、前掲『日本銀行ノ新築工事』(建築雑誌、第65号)、「日本銀行建築録」(前掲『辰野記念日本銀行建築譜』)、福島支店は、前掲『日本銀行福島支店の建築』(建築雑誌、第333号)に掲載。

注18) 日本銀行京都出張所の新築を担当した請負人は3人であったことが移転式の記録によって推察される。京都支店長から小樽支店長に宛てた明治44年11月25日の書簡(前掲『営業所新築ニ関スル書類』(自明治42年6月至大正1年8月))によれば、明治39年7月3日の移転式において「所長室ニ於テ請負人三名ニ辞令書ヲ交付セラルルコト(請負人工事中ノ勤勞ヲ表彰賞与セラレタルナリ)」と記す。ただし、請負人の氏名は未掲載。西部、大阪、名古屋の各支店の請負形態については不明である。

注19) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』の明治45年6月27日付、小樽支店長から文書局長・島郁太郎に宛てた控え文書によれば、「昨秋辰野工事顧問視察ノ際ニハ一式請負ニハ珍シキ上出来ノガナリトノ事モ聞及候」と記す。

注20) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』の明治45年7月8日付、文書局長・島郁太郎から小樽支店長・川嶋栄太郎に宛てた書簡によれば、「貴店建築請負人富樫文治授賞之義ニ付」「金杯壹個及清酒老樽ヲ賞与」することを記す。

注21) 原林之助は明治25年10月12日の造家学会通常総会で「一式受負と分業受負」を演説。一式請負の有益性を主張したが妻木頼黄、横河民輔、高原弘造らの反論を受ける(建築雑誌、第72号、1892.12)。原の主張した一式請負について城谷豊は、「建築経済研究という立場からみても記念すべき演説」であり「原の認識の正しさは、当時優勢であった分業請負からしだいに一式請負の優勢へ、という現実の推移の中で実証されていく」

と評価する(前掲「発注制度の改革」、pp.584～586)。

注22) 工事予定・進行類別表は、『日本銀行建物図面及び建築時図面綴 小樽支店』中に収められ、本館・金庫と他の建物および外構工事の予定(明治42年7月から45年7月まで)と進捗状況(明治42年7月から44年10月初旬まで)をグラフで表わしている。

注23) 入札要項に「数量表」、『一式請負人心得書』には「数量書」の記載があり「表」「書」で異なるが記述の経緯から内容は同様と考えられる。本論では各内容を述べる時は使い分け、一般的には「数量書」とする。数量表は『営業所新築ニ関スル書類』に綴られていないことから、本店の指示に従って入札関連の図面と書類とともに返却されたものと推察される。

注24) 葛西萬司：予算数量書は之を受負者に示さざるべからず、建築雑誌、第268号、1909.4。横河民輔：予算数量書に就いて葛西君に答ふ、建築雑誌、第271号、1909.7。葛西萬司：横河君の反問に答ふ、建築雑誌、第274号、1909.10

注25) 前掲、葛西萬司「予算数量書は之を受負者に示さざるべからず」、建築雑誌、第268号、p.168、1909.4

注26) 第33条「本行ヨリ交付シタル数量書中誤脱アリタルトキハ請負人ニ於テ見積書差出以前ニ本行監督者ニ申立テ承認ヲ經ヘキモノトス 何等ノ申出ナクシテ請負契約ヲナシタル後数量ニ誤脱アルバ発見スルモ手続上又ハ絵図面仕様書ニ依リ必要アルモノハ請負人ニ於テ完全ニ本工(ママ)工事労働工セシムル義務アルモノトス但此カ為メ増金ノ請求ヲナシ得サルモノトス」

注27) 前掲、葛西萬司「横河君の反問に答ふ」p.461

注28) 契約方法は、前掲、中村絹次郎『建設工事請負契約要論』(pp.29～30)によれば、発注者が所用数量を積算し、入札者が品目別に値入れをする契約を数量明細書付契約(Contract with Bill of Quantities)と呼び、イギリスの契約方式とする。

注29) 葛西萬司の日本銀行在職期間は、明治23年10月1日から28年12月30日、29年4月1日から33年10月22日であり、30年10月26日に技師長に就く。

注30) 前掲、城谷豊「発注制度の改革」p.588

注31) 前掲、中村絹次郎『建設工事請負契約要論』pp.33～35

注32) 竹野喜兵衛の住所は、「東京市神田区黒門町老番地」と記す。

注33) 『営業所新築ニ関スル書類』明治44年4月24日付、日本銀行総裁男爵松尾臣善は小樽支店へ宛て、「附属家轡場内ニ砂金分析用鋸解爐其他ノ設備」設置に対して179円96銭7厘の予算増額を通知。日本銀行小樽支店の砂金の買収は、『日本銀行沿革史 第二巻』(pp.797～805)によれば、出張所であった明治33年5月に北海道枝幸の砂金を購入する手続きが定められ、42年末までに買入れた重さは49万2,728匁、価格は200万292円であった。

注34) 『営業所新築ニ関スル書類』明治43年6月8日付の請負人代人富樫鐵造から日本銀行小樽支店長に宛てた「御願」では工期延長を1箇月として申請したが、明治43年6月13日付によれば日本銀行本店は「一層完全ニ成功スベキニ付」との理由から2箇月の延期にした。明治43年8月8日付、富樫文治から日本銀行小樽支店に宛て金庫新築工事の落成「御届」を提出。

注35) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』明治43年6月8日付、請負人代人・富樫鐵造から日本銀行小樽支店長莊田茂三郎へ宛てた「願書」。

注36) 落成届は「一 御行小樽支店新築工事ノ義去明治四十貳年七月六日ヨリ着手シ今般悉皆出来仕候間本日御引渡致度此段及御届候也」と記す。

注37) 第2条「請負人ハ本行ニ於テ確實ナリト認ムル保證人連署ノ請負證書ニ請負金額ノ凡壹割ニ相当スル価格アル保證品ヲ添ヘテ差出スヘシ(以下略)」

注38) 第9条「請負人ハ請負ヲ為シタル後違算、見積違、物価騰貴其他ノ原因理由トシテ請負契約ノ変更又ハ解除ヲ申出ツヘカラス但本行ニ於テ事情止ムヲ得サルモノト認ムルトキハ請負金額ノ壹拾分ノ貳以下ヲ納入セシメテ請負契約ヲ変更若クハ解除スルコトアルヘシ(以下略)」

注39) 第10条「請負人ノ違約ニヨリ本行ニ於テ請負契約ヲ解除シタルトキハ補證品ヲ返還セシ(以下略)」

注40) 前掲、中村絹次郎『建設工事請負契約要論』p.54

注41) 第7条「請負以外部局ノ工事ニシテ本行ノ都合ニ依リ他ニ請負ハシムルコトアルトキハ本請負人ハ該請負人ニ相当ノ便宜ヲ與ヘ工事ヲ遂行セシムヘシ(以下略)」

注42) 第13条「材料ノ内多少現品ヲ交付スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ其代価ヲ請負金額ノ内ヨリ引去ルヘシ(以下略)」

注43) 『営業所新築ニ関スル書類』大正元年12月17日付、「小樽支店新築費決算表」(控)によれば、当初予算に対する支払の差引残高は13,209円26銭5厘であり、明治42年契約時の新築工事は予算の範囲内で収められている。

注44) 『営業所新築ニ関スル書類』の明治44年11月付、富樫文治は「御願書」に「日本銀行小樽支店新築工事請負下格金調」を添付し、同調に明治42年9月25日からの仮渡金の内訳を記載する。

注45) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』明治44年11月14日付、小樽支店長から総裁高橋是清へ宛て、「新築工事ハ漸次進捗シ大略出来致候」と報告する。

注46) 前掲『日本銀行小樽支店新築工事予程及進工類別表』

注47) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』中にアスファルト購入と代金支払いについて明治42年9月から43年4月までの書簡があり、9月27日付に富樫がイギリス・グラリッジ会社製16トン日本銀行に購入依頼している。

注48) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』中、明治44年11月14日付、富樫文治から日本銀行支店長川島栄三郎へ宛てる。

注49) 前掲『営業所新築ニ関スル書類』中、明治44年11月21日付、文書局長島郁太郎は小樽支店長へ宛て、5万円を富樫文治へ下渡しすることを伝える。

(2007年12月25日原稿受理、2008年7月9日採用決定)